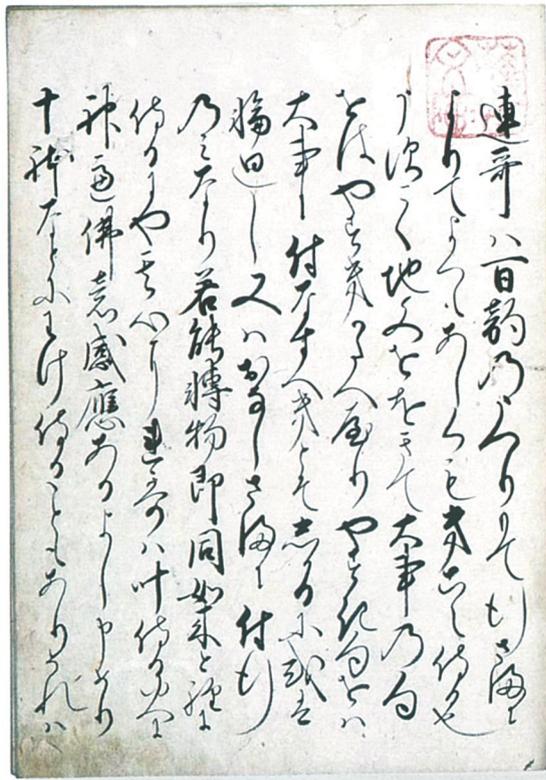


# 蓬 右

HÔSA



巻頭



「連歌延徳抄」表紙

# 東洋の印刷と版本

人は、伝達手段として文字を生み出し、さらに文章や著述をより多くの人々に伝える手段として、筆写から木版刷りや活字による印刷を考案しました。ドイツのグーテンベルグが活字印刷術を発明したのは十五世紀半ばのことですが、中国では七世紀頃には木版印刷が、十一世紀には活字印刷が行われていたといわれています。また朝鮮(高麗)では十三～十四世紀には金属活字による印刷がはじめられました。わが国では年代が明らかでない世界最古の印刷物「百万塔陀羅尼」が七七〇年に刷られています。以後経典をはじめ、詩文や儒書、辞書、物語文学あるいは版画などさまざまな出版がおこなわれてきました。本展覧会では、重要文化財『太平聖恵方』(中国・南宋時代)、重要文化財『高麗史節要』(李氏朝鮮時代)など約八十件の作品を通じて、東洋の印刷文化の歴史をたどります。

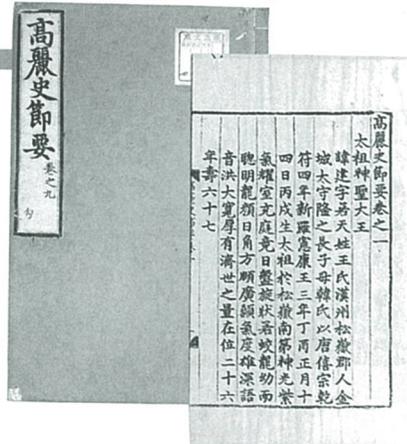


重要文化財 太平聖恵方 51冊の内  
南宋時代 12世紀

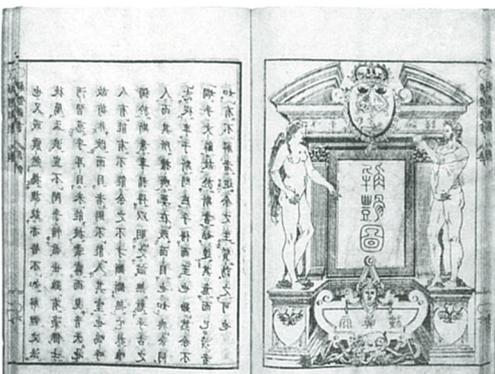
宋の太宗の時、王懐隠をはじめとする医官に命じ編纂された宋時代を代表する医療百科全書。図解を添えながら、各種の病気の症状や医療法、薬の調合法などが体系的に説述されています。本書は、淳化3年(992)に刊行された本を、南宋の紹興年間(1131～62)に校刊重刻されたものです。徳川家康の蔵書の一つで、駿河御譲本として尾張徳川家初代義直に譲られました。

重要文化財 高麗史節要 35冊の内  
朝鮮王朝時代 景泰4年(1453)

高麗王朝34代475年の歴史が編年体で収められた高麗国史で、紀伝体の『高麗史』(139巻)とともに、高麗王朝の正史として並び称されています。本書は、『高麗史節要』の現存唯一の完本として貴重です。朝鮮王朝における鋳字印刷は、1403年の「癸未活字」、1420年の「庚子活字」があり、本書に用いられた1434年鋳造の「甲寅活字」は、これらにつぐ活字です。「甲寅活字」は、晋代の秀書家衛夫人の字に似ているところから「衛夫人字」とも呼ばれた美しい筆書体で、字体の整っていることで「朝鮮万世の宝」とさえ称されています。



かいたいしんしょ  
解体新書 5冊の内 江戸時代 安永3年(1774)



江戸時代後期、洋学の伝来にともなって、蘭書の訳述や翻刻本などが出版されるようになりました。『解体新書』は、その代表的な木版による出版物です。中津藩医の前野良沢の指導のもと、小浜藩医であった杉田玄白・中川淳庵、良沢の門人石川玄常、幕府官医の桂川甫周らが、クルムス著『解剖図表』の蘭訳を会読し、漢訳した西洋解剖書です。江戸蘭学勃興の契機となりました。

# 江戸のコミック



江戸生艶気樺焼 3巻  
山東京伝作・画  
天明5年(1785)

とうかいとうちゅうびざくりげ  
東海道中膝栗毛 8編  
十返舎一九作 享和2年(1802)



近世怪談霜夜星 5巻  
柳亭種彦作・葛飾北斎画  
江戸 文化5年(1808)

江戸時代後期に盛んに出版された絵入りの読み物である絵草紙は、錦絵(浮世絵)出版や演劇(歌舞伎など)といった大衆文化と文学とが密接に関わりあうことで成立し、広く読まれたジャンルの本です。またこのころ、購入する場合と比べて非常に安い賃料で本を貸し出す貸本屋という業種が流行していたことで読み手の数に拍車がかかり、絵草紙ブームをおこしました。

さて、絵草紙の特徴は、一見してわかるその画面構成にあります。

伝統的な絵巻物などは、絵の場面と文章の部分を分けて配置していますし、また江戸時代の文学書もはじめは伝統のままに、絵を文章の雰囲気

づくりや、にぎやかしのような使い方ではさみ込む形をとっていました。

一方、絵草紙は基本的には、絵をベースにして画中の人物や背景のすき間に文章を配置していくという手法をとっています。こうした表現は、読み手にとっては文学というよりあたかも「絵そのものを読む本」といった趣で、現代のコミック(マンガや劇画など)に通じるところがあります。

また、本来が大衆向け娯楽読み物であり、かつ売れ行きを重視せねばならない商業出版物でもあったため、その内容自体は恋やおもしろさなどを前面にうち出した大衆迎合的なものが中心です。しかし単にそこにとどまらず、同じく大衆の関心事である世の中や政治などへの批判やからかいの気持ちもスパイスとして練り込まれていきました。ただ、こうした大衆迎合的な娯楽あるいはジャーナリズム的要素は、必然的に幕府の不興をかい、しばしば絶版命令や作者の処罰事件が起りました。

今回の展示では、江戸文学書のコレクターとして知られた尾崎久弥氏のコレクションを中心に、江戸時代の大衆文化の一翼になった絵草紙をご紹介します。

木村八重子氏講演会

「江戸の絵草紙」

平成十九年二月三日(土)午後二時より

会場 徳川園ガーデンホール

参加費 一般二五〇円 高大生七五〇円

(入館・入園料含む)

往復乗書にて事前申込、詳細は蓬左文庫講演係まで

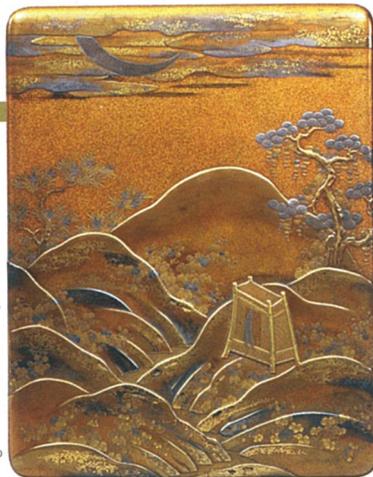
# こころの旅 — 名所と詩歌 —

日本人の美意識をうつす「やまと絵」は、四季折々の景物を詠んだ和歌に絵を添え、屏風に仕立てて室内を飾ったのが始まりとされます。四季の景物は、「国々の名高き所々」とたたえられた各地の名所と結びつき、春日野の若菜摘み、住之江の松風、龍田川の紅葉のような歌枕となりました。名所のイメージは、その始まりから詩歌と一体の関係にあり、文学とともに発展しました。

有名な詩歌の言葉が絵画化されることによって、それぞれの名所には、一定のイメージが定着しました。鑑賞者は説明がなくても、描かれている幾つかのモチーフの組合せから特定の詩歌を連想し、どの名所が描かれているかが理解できました。『古今和歌集』や『伊勢物語』は多くの名所イメージの典拠となっています。とはいえ、一度作られた名所のイメージも固定化されたのではなく、新しい着想の詩歌によって変化することがありました。時代とともに、新たな名所も生み出されました。「伊勢新名所歌合絵」では、伊勢神宮の神官が身近な伊勢の風景を愛でて絵に描かせ、歌を詠んでいます。「近江八景」は、琵琶湖をめぐる景勝地を、中国の瀟湘八景に重ねることによって表現しています。江戸時代に数多く刊行された各地の

名所図会は、実際の風景に取材した絵と伝統的なイメージの典拠となった詩歌をもとに掲載し、人気を博しました。名所を巡る旅は、単に景勝地を訪れるだけでなく、古人が詠んだ名歌名句と出会う営みでもありました。名所を題材とした美術品を、和歌や漢詩、紀行文とともに紹介します。

つた ほそみちず まきえりょうしばに  
葛の細道図蒔絵料紙箱  
(徳川美術館蔵)



『伊勢物語』第九段の「駿河なるうつの山べのうつつにも 夢にも人にあはぬなりけり」で有名な宇津山を意匠化しています。宇津山は、現在の静岡市近郊の宇津谷峠。同段の本文から、葛と山伏の笈が宇津山を連想させるモチーフとなりました。



よしの ずびょうぶ  
吉野図屏風 二曲一双 狩野常信筆(徳川美術館蔵)

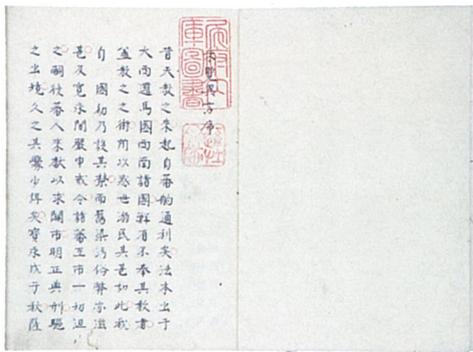
大和国(奈良県)の吉野山は、『古今和歌集』では雪の名所として歌に詠まれています。鎌倉時代以降、西行の歌を契機として桜の名所となり定着しました。

# 南蛮・紅毛の学問



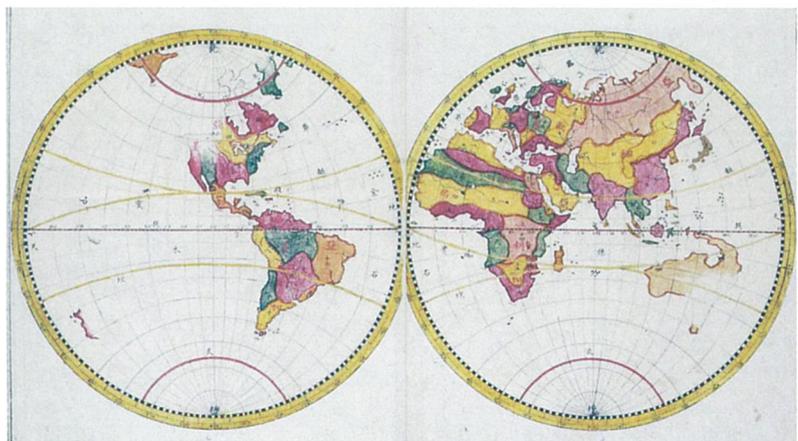
ぞうほかいつうしこう  
増補華夷通商考 5冊のうち  
宝永5年(1708)刊

長崎の町人西川如見(1648~1724)の著した外国地誌、商業貿易書(1695年刊)。鎖国以前の海外知識に基づき、中国から西洋諸国に至るまでの位置、風土、産物などを記している。本書は、著者自身による増補版。



さいらん いげん  
采覧異言  
新井白石著 正徳3年(1713)序

十六世紀に入ると、遠いヨーロッパ諸国からの貿易船が、インド、東南アジアなどを経て東アジアに進出し、日本にも鉄砲やキリスト教がもたらされたことはよく知られています。それらとともに、中国渡来の伝統的な学問(漢学)とは性格の異なる、西洋の学問も日本国内に伝えられました。当初に貿易にたずさわったのは、「南蛮人」と呼ばれた、カトリック(旧)教徒のポルトガル人、スペイン人でした。ついで、オランダ人、イギリス人も来航し、日本との交易に加わりました。先の「南蛮人」と区別し



しんせいちきゅうばんこくずせつ  
新製地球万国図説 2冊 江戸時代後期

1639年にアムステルダムで刊行された「新製万国図」に記入された内容を、桂川甫周らが訳した地理書。

て、「紅毛人」と呼ばれましたが、プロテスタント(新教徒)という相違もありました。彼らとの交易を通じて、医学、地理学、天文学などが日本人によつて学ばれ、やがて鎖国下で「蘭学」として本格的に発展していきます。書物・絵図などを通して当時の文化交流の姿を紹介します。

## 伊藤藤景と「城取図解」

平成十八年(二〇〇六)十一月八日から十二月十日まで蓬左文庫展示室2で開催された「尾張藩の兵学」展をご覧いただいた方は、会場の展示ケースのなかの「城取図解」という絵巻物をご記憶であろうと思います。

この「城取図解」は、縦二五・八センチメートルで、横幅は五巻全体で全長六二・四メートルに達する長大な卷子本で、彩色されたさし絵が多く含まれる図解入り築城書です。

本書(著者自筆本)は寛政九年(七九七)に九代尾張藩主徳川宗睦(七三三〜九九)に献上され、以来名古屋市蓬左文庫に伝来してきたものです。

著者の伊藤直之進藤景(はじめ景的、二七三八〜一八二二)という、尾張藩士で兵学者としても知られた人物のひとこととなり、「城取図解」成立との関係をもう少し詳しく検討し、尾張藩の兵学が当時の藩内でもった位置づけについて見通してみたいと思います。

### 一、伊藤直之進藤景

伊藤直之進藤景の経歴については、尾張藩士の履歴家譜綴である「藩士名寄」(蓬左文庫・徳川林政史研究所に分蔵)に藤景本人分が伝来していないため、不明確な部分がありますが、それでも名古屋市鶴舞中央図書館蔵「国秘録 伊藤直之進上書」の追記に

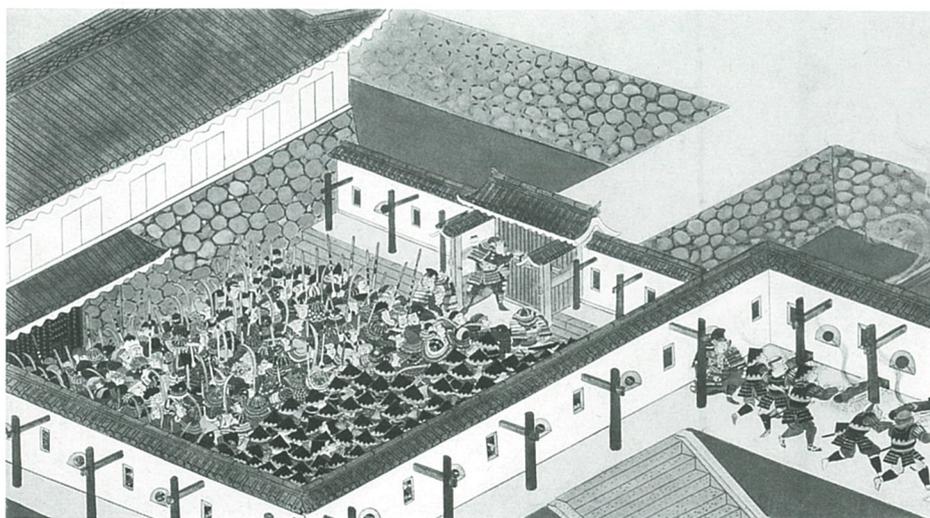
よれば、藤景は、はじめ支藩美濃高須家に仕え、寛政元年(七八九)に尾張藩の普請見分役に転じ、文化五〜十年(八〇八〜三三)ころ成立した「尾張石高帳」から、十三石三人扶持で徒組に属していたことがわかります。没年については「藩士名寄」により、息子鶴之進(実名不詳)が文化八年七月に亡父の跡目を相続していることから、このころ死亡したことが判明します。「国秘録 伊藤直之進上書」の追記と「藩士名寄」(徳川林政史研究所蔵)により、伊藤家は禄高に多少の増減はあつても、代々徒組に属しており、騎乗の身分より低い下級藩士の家柄であつたといえます。

藤景の自著「城取図解」の奥書によれば、築城の名人として、山本勘助(甲斐の戦国武将武田信玄の軍師)、北条氏長(北条流兵学開祖、二六〇九〜七〇)、山鹿素行(山鹿流兵学開祖、二六二二〜八五)ら甲州流系統の兵学者の名をあげているので、藤景が甲州流系統の兵学を学んだことは明らかです。しかし、藤景は奇妙なことに自分の師匠の名をあげていません。結果として秘伝を公開することになるので、師匠の名をあげるのを遠慮したのかもしれませんが。

さて、「城取図解」の書名「城取」とは、「城を攻め取る」の意味ではなく、「城を構え設ける」の意味なので、本書は図解入りの築城書ということになります。江戸時代には、新規築城は武家諸法度により厳禁されており、事実上不可能に近かったのですが、藤景は実践不可能な「机上の学問」に甘んずることな

### 城取図解 巻四

狭間(矢・鉄砲などを放つために、城堀に設けた穴)の解説で、内枳形(城門内広場)に集結してまさに城門外に出撃しようとしている城兵が描かれています。



く、普請・作事役(土木・建築担当者)が城の修理を担当する際には築城知識をもつことが不可欠という主張を述べています。口伝だけでは理解しにくいので、土佐派の絵画を学んだ子息鶴之進に図解させるといふ合理性をもちあわせていました。実際、城門や堀などの形状が図解されているだけではなく、城兵たちがどのように防戦すべきかについても図解しており、城の防御機能について大変わかりやすい説明になっています。

## 一、伊藤直之進藤景と寛政軍制改革

従来、尾張藩士伊藤直之進藤景の名が知られていないのは、藩政改革の意見書を九代尾張藩主徳川宗睦に提出したとされたからです。この意見書には本来表題はなく、単に「伊藤直之進上書」と称されましたが、のちに「赤心秘書」と命名されたといえます。なお、『名古屋市史』人物編二に、「築城の巻を名づけて赤心秘書といい」とあるのは、先述の「城取図解」と混同したものと思われる。

また藤景は、藩士の経済的困窮、藩の軍備の不備を憂え、意見書でその是正を訴えました。とくに、當時の尾張藩では世禄制(家禄の世襲制)が採用されていないため、当主が死亡して若年の跡継ぎしかいない下級藩士の家族には微々たる禄しか支給されず、若者が生活を支える内職などに追われて武芸を学ぶ余裕もない状況があると指摘しています。藤景は藩の軍備充実のため世禄制の復活を要求します。世禄

制の復活は、九代藩主宗睦の晩年の寛政十二年(七九九)四月に実現します。

以上のように、藤景は、寛政元年(七七八)に尾張藩の普請方見分役となり、同九年(七九七)に「城取図解」五巻を献上し、同十二年四月までには「伊藤直之進上書」(「赤心秘書」、美濃紙九十枚ほどに記載)を書き上げたと思われます。十年ほどの期間に、藤景は資料を収集し、大部な両書をまとめるのに集中したと推測されます。兵学者として知られていたとはいえ、微禄の下級藩士に過ぎない藤景にここまで努力を傾けさせたのは何だったのでしょうか。

寛政三年(七九二)江戸幕府の老中松平定信は、異国船の来航にそなえて諸藩に海防を指令しました。それを承けて九代尾張藩主徳川宗睦は、同六年(七九四)九月に尾張藩の軍制改革を実施しました。藤景の「城取図解」「伊藤直之進上書」(「赤心秘書」)は、兵学者の立場から藩政の不備を指摘し、改善を求めたものといえます。その背景には、寛政の軍制改革に代表されるように、藩内における軍備への関心の高まり、海防への差し迫った要求などがあつて、藤景の発言の後押しをしたとみられます。藤景は、兵学者としての立場から藩政に役立つと努力しており、その努力は藩内において相応の重みをもつて受け取られたと思われます。のちの、激動の幕末に藤景の意見書はその価値を認められ、再び注目を浴びることになります。

(下村信博)



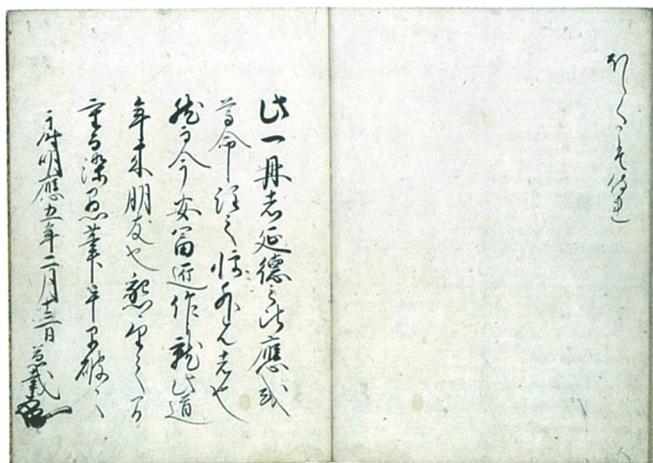
城取図解 卷五奥書

表紙の「連歌延徳抄」は、別に「連歌求詠書」「兼載伝授連歌秘書」ともよばれるように、室町時代の連歌師猪苗代兼載(いなむしげんさい)「(四五二一五〇)」による連歌の解説書です。

著者猪苗代兼載は、陸奥国会津郡の大名芦名氏の支流猪苗代家の出身で、若くして出家して法名興俊を名乗ります。やがて連歌師心敬(しんけい)「(四〇六〇七五)」に連歌の才能を見出されて師事しました。師の没後に上洛して活躍し、号を兼載としました。兼載は、延徳元年(四八九)には宗祇「(四二二一五〇二)」の後をうけて、京都北野天満宮で行われる連歌会の宗匠という連歌師界最高の地位を得ました。翌二年夏に周防国山口に下り、翌三年三月に都にもどりますが、この間に周防・長門など数カ国の守護をかねる大内政弘「(四四六〇九五)」に書き与えたのが「連歌延徳抄」の最初です。このうち、明応五年(四九六)二月に年来の連歌の友人安富修理の求めにより、兼載が最初のものに訂正を加えて与えたのが本書(再撰本)です。兼載は、自ら書写した本書の奥書にその経緯を記しています。

そもそも連歌は、連歌師の主導で参加

者たちが和歌の上の句五・七・五と下の句七・七とを交互に詠み連ねるものです。それらの句の連ね方の工夫が重視されており、兼載は師の心敬ら先人の句を挙げてそれを分かりやすく解説しています。



「連歌延徳抄」奥書

## 蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174  
ホームページ <http://housa.city.nagoya.jp/> <蔵書検索もできます。>

### 交通案内

#### ■公共交通機関をご利用の場合

##### ●名古屋駅より

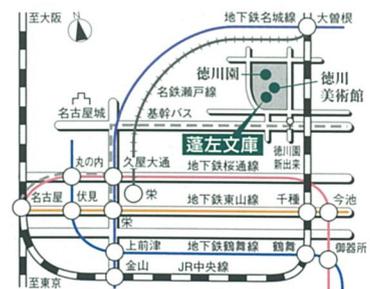
- 【市バス】名古屋駅バスターミナル(テルミナ2F)グリーンホーム7番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分
- 【名鉄バス】名鉄バスセンター(メルサ3F)4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分
- 【JR】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分
- 【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分 桜通線「野並」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

##### ●栄より

- 【市バス】栄バスターミナル(オアシス21)3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

#### ■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場(有料 30分 120円)をご利用下さい。



### ご利用案内

- 休館日/月曜日(祝日のときは直後の平日) 12月中旬～1月3日 ※催事により変更することがあります。
- 展示室/有料 一般:1200円 高大生:700円 小中生:500円(蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧)  
【開室時間】午前10時～午後5時(入室は午後4時30分まで)
- 閲覧室/無料・館外貸し出しはいたしません。  
【閉架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時  
【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第72号 ☆平成19年1月4日発行 ☆編集・発行:名古屋市蓬左文庫 ☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷:菱源(株)  
※この冊子は再生紙(古紙配合率100%、白色度80%)を使用しています。